

「礼」と「あいさつ」について

耕人塾では実践活動の一つ「あいさつ」を重んじています。活動が始まる前には、元気な声であいさつをして「礼」をします。そこで、今回は、はじめに「礼」について考えてみましょう。

授業が始まるときの「起立、礼、着席」や剣道・将棋・茶道・華道など全て「礼」に始まり「礼」に終わります。日常生活の中でも、「おはようございます。おやすみなさい。ありがとうございます。いただきます。」など基本的な生活習慣として家庭の中で大切な礼儀とされています。

大辞林 第二版（三省堂）によると、礼とは『社会生活をする上で、円滑な人間関係や秩序を維持するために必要な倫理的規範の総称』と、記されています。

「武士道」（新渡戸稲造著）では、『礼とは、他人に対する思いやりを表現すること』『他者の感情を尊重することから生まれる謙虚さが「礼」の根源である』と述べられています。つまり、相手に対する誠意をどう伝えるかです。相手に対するあいさつ、会釈、靴を揃えることなど身近なところで、他者に対する誠意や思いやりの心を大切にしたいものです。

礼をすることは、する方もされる方も気持ちの良いことであり、他国の人々が日本の風習に関心を持つ心もこのことが一つにあります。礼儀正しい日本人というイメージは、我々日本人が誇りに思い、守り続けていかなければならないと私は思います。美しい国、美しい人々と言われることは我々の世界に誇る財産ではないでしょうか。

次に「あいさつ」についてです。「あいさつ」は漢字で「挨拶」と書きますが、「挨」は推す、「拶」は迫るという意味で、意識すると相手の心を推しはかりながら自ら心を開いて近づくとのことです。

では、朝のあいさつは、昼の「こんにちは」や夜の「こんばんは」と何が違うのでしょうか。そうです。朝のあいさつだけは「ございます」という丁寧な言い方になっているのです。「おはようございます」のあいさつは、歌舞伎から始まったという説があります。歌舞伎の役者は、お化粧などのために出番よりも早く行かなければなりません。その役者が楽屋に入ると、楽屋にいる番の人が「お早ようお着きですね」と声を掛けたのが始まりと言われていました。「お早くお仕事大変ですね」という心遣いが短くなって「おはようございます」となった訳です。「ございます」がつくのは、相手を思いやる気持ちが含まれているのです。朝のあいさつは、自分を変える魔法の言葉です。日々繰り返される一日のスタートですが、何かを変えるパワーを持っています。

いずれにしても、時と場に応じ、自分から相手に近づいていくような親しみのある言葉やしぐさは、自分と相手を大切にすることに繋がります。自分も周りも温かい気持ちになるあいさつをしたいものです。耕人塾でも、活動を始める前に、「よろしくお願ひします」と声を出して礼をするとき、改めて、いつもより元気に爽やかな声であいさつをしてみませんか。

「稽古とは一より習ひ十を知り十よりかえるものその一」（利休百首）

稽古とは繰り返すことであり、十まで習ったらそれで終わりではないということです。原点に戻りまた突き進むのです。何度も何度も繰り返すうちに新たな発見、気づきがあるのかもしれませんが。耕人塾の塾生の皆さんの中には、継続して参加している塾生もいます。また、新しく入塾した塾生もいます。共に学び、繰り返しながら新たな学びがあるのではないのでしょうか。

耕人塾では、10月の活動で、表千家教授 石田邦子先生から「茶道を日常に生かす」ことについてご講話と体験活動を通してご指導をいただくことになっています。このとき改めて「稽古を習うこと」の意味について学びましょう。利休百首を一読してみると、今の時代だからこそ価値ある言葉が、不易のものとして現代に引き継がれているような気がします。